

Title	ボアギユルベールの「富の本質論」：フィジオクラアト学説の出所再吟味
Sub Title	
Author	下田, 博
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.7 (1932. 7) ,p.1206(86)- 1243(123)
JaLC DOI	10.14991/001.19320701-0086
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320701-0086

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ボアギユルベールの「富の本質論」

— フイジオクラアト學說の出所再吟味 —

下 田 博

瀧本博士は本誌第二十卷第八號所載の論文「フイゾイオクラアトの學說の出所」の中に於いて、先づフイジオクラアトの學說中主要の點として、特に注目に値するもの六項を掲げ、更に其の中ケネー一派の主張として、最も顯著に知らるゝものとして、(一)自然法を信奉し、自然の秩序と云ふことを重じたること、(二)教育を重大視し、放任主義を高調したること及び(三)専ら農學を主とし、農業を尊重したることの三項を摘出し、而してフイジオクラアトが其の前代に榮えたるマーカンチリストの如く、各自銘々に勝手の意見を唱へたるものにあらず、殆ど皆ケネーを首領として儼然たる一つの學派を形成してゐたことよりして、以上の三點に付き、専らケネーの所說に付いて此れが基く所を研究せられたる結果、其の出所を以て明確に支那學說に外ならないと結論せられてゐる。

筆者は先づ博士の目してフイジオクラアトの最も顯著なる主張とせられてゐる以上の三點を二つに纏め、別に財政改革の一點を加へて三つとし、此の三點を以てフイジオクラアトの學說の根幹を成すものと思惟する。即ち(一)重農思想(二)自然法乃至自然的秩序及び自由放任の思想(要之、自然的自由の思想)及び(三)財政改革の思想

これである。そこで此の三大根本思想中前二者に就いて觀るに、一體農學研究がフイジオクラアトを自然法思想に導いたのか、それとも自然法思想が彼等をして農學研究に興味を深からしめたのか、其の何れが主たり何れが客たるかは、博士も云はるゝが如く、識別すること困難であるが、然しフイジオクラアトの學說を以て先づ就中自然法乃至自然的秩序の學說であると做し、此れを出發點とし、同時に、重要視したのは、ケネー其人よりも、ケネーの正系の門弟、殊にメルシエ・ド・ラ・リヴィエール(註一)及びデュボン・ド・ヌムール(註二)であつた。而して今日フイジオクラアトの學說を論述する多くの學者は、概して、此れ等ケネーの門弟の所說に従つて、先づ自然法乃至自然的秩序の思想を論じ、次いで重農思想を述べてゐる。(註三)

彼等に依れば、フイジオクラアト學說體系の根本觀念は自然的秩序であり、重農思想は此れに比すれば其の重要性に於いて遙かに劣るものとせられる。否、久しき間、フイジオクラアトの重農思想は其の自然法乃至自然的秩序及び自由放任の思想が極度に重要視せられたるに反して、聊か過度の侮蔑の的たるに過ぎなかつたのである。(註四)

然し、フイジオクラアトの學說の諸部分の本質的價值若しくは其の重要性はともあれ、此れを歴史的に觀れば、筆者はフイジオクラアト、殊にケネーの學說體系は先づ重農思想、次いで自然法乃至自然的秩序及び自由放任の思想の順序をとるべきものであり、而してフイジオクラアトの重農思想は、其の本質に於いて商工業的なる前代のマーカンチリズムに對する反動として生じ來つたものであると思惟するものである。周知の如く、マーカンチリズムと共に、中世農業經濟思想は排除せられ、茲に大體に於いて商工業本位の思想が唱へらるゝに至つた。勿論マーカンチリスト就中佛蘭西の所謂コルベルチストが全然農業的利益を否認したと主張することは正確でない。モンクレティアン(註五)コルベル(註六)何れも熱心にすら農業的利益を主張したものである。然し彼等の思想傾向が大體

に於いて農業的利益に背反するものであつたことは否定し得ない。これを具體的政策に觀れば大體に於いてマーカ
ンチリスト殊に所謂コルベルチストは労働を廉價に購入して製造品の原價を低廉ならしめ而して外國市場に於いて
最も有利なる競争をするために、必然労働者の生活必需品、殊に小麥の價格を低廉ならしむる政策を採つたのであ
る。(註七)従つてマーカントリストの政策の進展の結果、農耕者、殊に小麥の生産者に異常の桎梏と負擔とが課せ
られ、其のために農民階級の貧窮を誘致したことは茲に縷述するを要しないであらう。此の農民の貧窮化は更に路
易十四世の非政、殊に外に對する無暴なる屢の出征と内に於ける放肆なる奢侈、従つて必然誘致せられた苛酷なる
徴税制度に依つて一入助長せしめられたのである。(註八)

當時農民の慘狀を敘述せる多數の著者の中で、殊にラ・ブルエール(La Bruyère)が其の著「Les Caractères de
Théophraste traduits du Grec, avec les Caractères ou les Mœurs de ce siècle, Paris, 1688, chap. X. De l'hom-
me」の中に描いてゐる農民の姿は悲壯である。曰く、「田園の到る處に、牝牡の、一種の野獸が見られる。黒く、青
ざめて日に焼け、地にこびりつき、何物にも打克つ頑強さを以て土地を掘り耕してゐる。彼等は明瞭な言葉らしい
ものを發してゐる。彼等は眞直に立上ると、人間らしい顔付きを見せる。否、實際、彼等は人間なのだ。彼等は夜
になれば茅屋に歸り、其處で黒麵麩と水と草木の根とを食べて生きてゐる。彼等あればこそ他種の間人は生きんが
ために播種し、耕耘し而して收穫する勞苦から救はれるのだ、故に彼等は其の播いた麵麩を缺かないのが當然であ
る。(註九)と。然るに、彼等は食に窮し群をなして死んだ。(註一〇)然も農民階級の貧窮は必然社會の諸他の階級の
窮乏を誘致するものである。

フエネオン(François de Salignac de la Mothe Fénelon)は其の「Remontrances à Louis XIV, 1694」の中

に於いて曰く、「王が我が子の如く慈しみ又從來王のためには水火の苦をも厭はなかつた王の民は、餓死してゐる。
土地の耕作は殆ど抛棄せられてゐる。田舎も又都市も住民は絶えてゐる。凡ゆる職業は萎靡沈滞して最早や労働者
を養つてゐない。凡ゆる商業は殲滅してゐる：：故に斯かる貧窮せる人民から金銀を獲るのでなく、寧ろ彼等に施
捨を爲し而して彼等を養はねばならぬのである。全佛蘭西は最早や惟だ荒涼として貯へ無き一大施療院に外ならな
い：：王は、求め啣つて已まざる多數の人民に依つて迷惑がられてゐる。然かも、王よ、身に斯かる一切の困苦を
招いたのは、王自身の致す所である。何故と云ふに、全王國が破滅せんとしてゐるのに、王は手中に凡ゆる物を有
し、従つて人民は王の施與なしには生きて行くことが出来ないからである——然るに人民が額に汗して獲得せんと
努めてゐる麵麩を王の戰の爲に租税として剝奪することに依つて、彼等を絶望せしめ無慘にも死に致らしむるとは、
王よ、慙愧の至りではないか：：然し人民が麵麩を缺く限り、王自身も亦金銀に窮するものである。(註一一)と。
而して時局は正に此の言葉の通りであつた。此の儘に推移すれば應ては國家的破産たるより外はなかつた。即ち佛
蘭西の普遍的窮乏は路易十四世の治下、殊に其の後年に至つて絶頂に達したのである。

茲に於いてか、何等かの對策運動は必然起らざるを得なかつた。而してそれは先づ差當り、逼迫し紊亂せる當時
の財政の救濟若しくは改革運動として現れた。佛蘭西史上第十七世紀及び第十八世紀は經濟的、殊に財政的窮乏對
策が最も普遍的に研究せられた時代であるが、殊に路易十四世の治下に於いては恰も萬人萬策を提言するの觀を呈
した。即ち此等對策の研究に關する當時の著書及び小冊子は實に無慮一千二百の多きに達してゐる。(註一二)然ら
ば彼等に依つて時局は救濟せられたか。否、何となれば、彼等は何れも皆單なる彌縫策を提言せるものに過ぎな
つた。換言すれば、當時の窮乏は此れを誘致せる根本的普遍的原因にして廢除せられざる限り、斷じて救濟せられ

得ざるものであつたに拘らず、彼等は此の簡單にして重要な一事を認識しなかつたからである。彼等の一時的窮策を以て逼迫せる時局を眞に救済することは固より不可能であつた。

然らば此等の一時的糊塗的救済運動に代つて當時の社會經濟狀態に對する根本的改革的批判的新運動が出現せざるを得ない氣運は既に充分醸成せられてゐたではないか。時代は正に斯かる新運動を要求してゐたのである。然かも、既述せるが如く、時弊にして大體マーカンチリズムの所産であつたとすれば、此の新運動がマーカンチリズムに對する批判的革命的性質を有するものであつたことは必然の勢と云はねばならぬ。即ち彼等の批判の對象は明らかにマーカンチリズムであつたのである。故に當時の社會經濟狀態に對する批判的革命的運動として茲に重農的自由的運動は當に唱道せらる可くして唱道せられたのである。其の間には必然的關係が存したのである。而して大體に於いて、マーカンチリズムと相反する觀念の上に立つ此の新運動は第十七世紀の末葉先づルアンの一角より現れた。ボアギユルベールこれである。次いでそれは第十八世紀の前半を通じて旺盛を極むるに至つた。エルベール、(註一三)デュバン、(註一四)及びグウダル(註一五)等これである。而してそれは最後にケネーを首領とするフィジオクラフトに至つて正に其の絶頂に達したのである。

筆者は故にフィジオクラフト、殊にケネーの學說の出發點たり根本たるものは正に先づ重農思想であり、(註一六)其の自然的秩序の思想は寧ろ後にケネーの門弟に依つて敷衍せられ、彼等に依つて恰もフィジオクラフトの全學說の如くに重要視せらるゝに至つた、即ちケネーは重農思想より發しこれを主としたるに反して、彼の門弟は自然的秩序より發してこれを主としたものであると思惟するのである。従つてフィジオクラフト、殊にケネーの學說の出所に關する限り、それは重農思想の由來の檢討に初まるべきものであり、而して其の由來は當然マーカンチリズム

の批判に溯るべきものである。

瀧本博士は前掲論文中に於いて、先づケネーの自然法思想を論じ、大體ケネーが一七六七年の三月乃至六月に涉つて「エフヘメリヤ」(Ephémérides)誌上に掲げた論文「支那の専制政治」(Despotisme de la Chine)の中に於て説いてゐる所を根據として、ケネーの自然法思想を支那太古の學說に淵源せるものであるとの新説を立てられ、而して自然法思想と重農思想との關係を論じて「此の二つの事は最も密接の關係を有するものであつて、農學に従事すれば自ら自然法の觀念を起し、自然法を信認すれば、自ら農學の興味を起すべきは明かであらう」、「農學を重じ農學を研究する者が、自然法の觀念を生じ、自然の秩序を信するの傾向あるは、當然のことにして、農業を以て立國の本とする太古の國民に於ては、概ね皆物理的法則と道徳的法則とを混同し、自然法の觀念の下に合致して天道人事の軌範となして居つたのである。故に農業を主とする國民は自ら迷信的に天を信仰するが如く思はるゝも、是れ亦止むことを得ざる必然の結果である、何となれば農業其の物は常に天時天候に依頼するものであつて、如何なる人力を以てするも、天道に反し、天理に背きて、成功すること能はざるが故である」、「即ち自然法の觀念は農業に依つて起り、農業は又自然法の信用に依つて奨勵せらるゝに至つたものではあるまいか」と做し、更にケネーの重農思想の出所に言及せられて「故にケネーが自然法に最も重きを置くの學者として農學を人世最要の學問となし農業を社會最重の職業となしたるは決して偶然の事ではあるまい、然かもケネーは農民の子であつて、農家に生長したれば其の本職の醫者であつたに拘らず、平生農學に就て多大の興味を有し、其の佛國王の宮中にあるや同僚彼を目するに農學狂を以てしたるが如き事實より之を推測すれば、…彼は豫て農學を研究しつゝ、偶まツ・ハルドの支那歴史(註一七)などを讀み、同國の制度の完備したることを知り、且つ其の制度が自分の意向に投じて深く感じ

たる結果が、後年に於ける彼の經濟學說となつて現はれたるものにあらざるかと思はるゝ」とてケネーの重農思想をも亦支那先王の制度及其の學說に影響せられて生成したものであるとせられてゐる。

吾人は屢フイジオクラートの學說と當時の哲學思想との關係を強調し、フイジオクラートを以て當時の哲學者から受けた思想を惟だ經濟學的に翻譯し置換へたものに過ぎないと説き、又彼等を以て基本的公理の基礎の上に一學說を樹立せんと專念せる、全く抽象的、先驗的、演繹的方法論者であると説く學者のあるを知る。此等の所説が採るべからざるものたることはルネ・ゴンナルの云へる所であり、(註一八)瀧本博士も亦前掲論文中に於いて「根據なき憶説」であるとせられてゐる所であるが、然かも博士が依つて以て此等の所説を論駁し得たりとせらるゝ博士の所謂支那的起源説も亦、筆者を以て觀れば、實に博士が目して探るに足らずとせられてゐる此等の所説と何等選ぶ所がないのである。即ち筆者はフイジオクラートの學說と當時の哲學思想との關係を強調する説、及び彼等を以て全く抽象的、先驗的、演繹的方法論者と做す説と共に、博士の所謂支那的起源説にも亦斷じて賛同し得ざるものである。成程フイジオクラートの學說の出所に關する斯かる考察は極めて論理的に出来るであらう、殊に博士の支那的起源説に至つては全く着眼の奇抜以て耳目を欲たしむるに充分である。然し此れを其の儘承認することは出来ない。筆者は先づ博士の所論中何處を探して見てもフイジオクラートの學說を當時の時代的背景との關係に於いて論述せられてゐる箇所が無いのは、學者の思想と社會の事實との密接不可離の關係を力説せらるゝ博士平生の所論(註一九)に徴して頗る奇異の感を抱かしめらるゝものである。

然かも、周知の如く、「フイジオクラートは單に一經濟思想團體ではなかつた。彼等は政治運動團體であつた。」(註二〇)彼等の研究の對象は明らかに「富」にあらずして「政治」であつたのである。(註二一)彼等は斷じて純理を

極めんとしたものでなかつたのである。彼等の研究の對象は彼等の眼前に曝露せられてゐる當時の現實の狀態であつた。(註二二)然かも其の狀態は、既述せるが如く、マーカンチリズムの餘弊とアンシャン・レジムの惡弊とを遺憾なく曝露せるものであつた。彼等が此れを看過する筈は無かつたのである。現にケネーは其の最初の經濟學的論文、即ち一七五六年にディデロ(Diderot 1713-1784)の「百科辭書」(Encyclopédie)中に寄せた論文、「小作人」(Fermiers)の中に於て農民の窮狀を敘し、其の三大原因として(一)直接税(taille)兵役(milice)及び無償勤務(corvée)等農村に對する過重の負擔に依る農村子弟の都市移住従つて誘致せらるゝ資本及び勞働の中央集中化の傾向、(二)農業的投資者に對する其の資産を脅す不當の課税及び(三)穀物取引に對する種々の妨害的制限を指摘し、之が對策として兵役の義務の民兵に對する免除、不當不公平の税制の改革及び穀物の自由交易、就中、其の輸出の自由放任の必要を主張し、更に注目すべきことには、耕作費用を詳細に研究し、又農業に於ける牛馬の使用を奨励し、是を使用せざる農民の貧困を精細に敘する等、當時の農民の實生活に即した、極めて實踐的技術的農業救濟意見を述べて、結局一國農業の損失即ち國民的富の減少を來たすものなりと論斷し、(註二三)次いで又一七五七年に同辭書中に寄せた論文「穀物」(Grains)の中に於いては、コルベルチズムの遺策が佛蘭西國土から農業的生産物を驅逐し、佛蘭西が奢侈品の製造場と化しつゝあるを指摘し、非難し、而して更に精緻なる計算に依つて商工業立國の不利を説き農業立國の要を強調し、佛蘭西が商工本位主義を棄て、農本位主義に立歸る時は現在と比較して國富の剩餘が約五倍に達すべきを説き、其の手段として現在佛蘭西が農場、果樹園就中葡萄園に加へてゐる種々の制限を撤廢して生産の増大を計り、又貧困なる農民に課せられてゐる過當の租税を廢止して彼等を鼓舞するの要を主張してゐる。(註二四)尙彼は同辭書に「明證」(Evidence)「人間」(Hommes)「租税」(Impôts)及び「利子」(Intérêts)を

寄稿し、更に一七五八年、有名なる「經濟表」(Tableau Economique)發表の少し前に「人口、農業及び商業に關する興味ある問題」(Questions intéressantes sur la population, l'agriculture et le commerce)(註一五)を發表したが、彼の此等の初期の經濟學的著作の中に現はれてゐる思想は何れも極めて實證的、實踐的且つ屢卑俗的であつたのである。故に當時のケネーの思想體系を求むるならば、それは少くとも當時の現狀に立脚せる、従つて事實の觀察の上に基ける實證的思想、及び直接實際的效果の獲得——殊に農業振興及び財政改革——を目的とせる實踐的政策的思想であつたと思惟せられるのである。即ちケネーは、ボーヴェンをして「十分一稅論」を、又ボアギユルベールをして其の諸著を書かしためたと同じ時代的影響の下に先づ寧ろ卑近な重農思想及び租稅改革思想を表明したのである。

周知の如く「經濟表」發表の翌年一七五九年頃から、ケネーは一躍有名となり、茲に彼は、彼の既に發表せる經濟學的諸勞作の中に表明せられてゐる思想及び「經濟表」の中に展開せられてゐる思想を把握し、而して一派を構成せんとする、熱心なる門弟に取捲かれて、一團の首領となつたのである。而して此の時より所謂フイジオクラートの學說の流布が花々しく行はれたのである。即ちケネー自身一七六五年に「農商業及財政雜誌」(Journal de l'agriculture, du commerce et des finances)に自然法に關する論文「自然權」(Droit naturel)を掲載したるを初めとし、續々論文小冊子(註二六)を發表したる以外に、ケネーの門弟の熱心なる努力に依つて、茲にフイジオクラートの學說は完全に一世を風靡し、同時に著るしく體系化されたのである。而して殊にケネーに取つては現實の狀態の實證的分析の結果たり乃至歸納的研究の結果であつた自然法乃至自然的秩序の思想は、今やケネーの門弟に依つて研究の出發點とせられ、同時に著るしく抽象的論理的に表明せられ、且つメルシエ・ド・ラ・リヴィエール殊にデュボン・

ド・ヌムールが「フイジオクラシイ」(Physiocratie)を「自然的秩序の科學」(la science de l'Ordre naturel)と定義するに及んで恰もフイジオクラートの全學說の如くなつたのである。茲に吾人は師ケネーの思想の門弟に依る偉大なる發展を見るのである。(註二七)

故に「……ケネー及びケネーの活動を述べるのに、凡ゆるものを全部彼に歸することは適當でない。フイジオクラートの學說の凡ゆる思想の祖をケネーに認めやうとし過ぎる、ケネーの門弟の熱烈なる讚辭を文字通り解すべきでない。フイジオクラートの學說は全部ケネーの頭腦から出たものではない。即ち其の門弟が師ケネーに及ぼした反動、彼等が彼の思想に加へた修正——緩和若しくは誇張等を等しく斟酌せねばならぬ。而して其の理由は……容易に説明せられる。即ち流布者は屢改革者よりも遙かに論理的なるものだ」と云ふことこれである。……ケネーは屢彼の眞意に反してフイジオクラートとなつたのである。(註二八)故にケネーの眞意、殊に其の學說の出所に就いては、吾人はフイジオクラートの學說の流布せらるゝに至つた以前のケネーの思想に溯らねばならぬ。而してフイジオクラートの學說の流布以前の彼の思想は、其の門弟殊にメルシエ及びデュボンとは反對に、寧ろ當時の現實の問題たる農業救済及び財政改革に存してゐたのである。従つてそれは又當然當時の現實の狀態を離れて考へ得ないのである。

然らば、瀧本博士の指摘せらるゝが如く、ケネーが後年に支那研究を行つたことはあらう。然しそれはケネーの學說に、補足的影響をこそ與へたれ、ケネーの全學說がこれに依つて影響せられて生成したなどは斷じて考へ得られないのである。マーカンチリズムの餘弊とアンシャン・レディムの惡制度との下に呻吟せる當時の下層階級、殊に農民階級の窮狀に直面しつゝ、ケネーが全然これに影響せられずして、遠く支那思想に影響せられて其の重農學說體系を作り上げたなどは、餘りにも當時の「社會の事實」を無視した架空の所論と云はねばなるまい。それこ

を博士自らの所謂「空想空談」(註二九)でなければならぬ。博士はケネーが「平生農學に熱心なる所に支那が特に農業を重んずる國風なることを知り、益々研究を重さねて遂に一種の重農學説を思付きたるものなるべし」と云はるゝも、抑も最初のケネーの重農學説は、既述せるが如く、農學と云はんよりも寧ろ卑近の農術を説けるものであつた。即ちそれは當時の農民に依つて直接實際に適用せらる可きものであつた。其の眞意が當時の疲弊せる農民階級の救済にあつたことは明らかである。即ちケネーが、博士の云はるゝが如く、支那の重農學説を單に學説として研究して居るべく、當時の農民の現實の貧窮の度は餘りにも深刻であつたのである。支那學説を研鑽して重農學説を樹立する前に、直譯現實の農業振興に資することを思想しなければならなかつたのである。即ちケネーの重農思想は遠き東洋の支那思想に影響せらるゝ前に、寧ろ祖國の眼前に展開せられてゐた悲惨なる農民階級の現實の生活事實に影響せられて生じたものと云ふべきであらう。ケネーの思想は當時の社會的事實の反映でありまたこれを當時の社會的事實との關係に於いて論じてこそ始めて意義あるものとなるのである。

「フィジオクラフトの學説の出所」を斯く解する筆者は、従つて、マーカンチリスム及びアンシャン・レディムの批判に於いてフィジオクラフトの學説の先驅を爲したボアギェルベールの思想の研究に先づ筆を起すものである。

- 註一 Paul Pierre Mercier de la Rivière, *L'Ordre naturel et essentiel des sociétés politiques*, 1767.
- 註二 Pierre Samuel Dupont de Nemours, *Physiocratie ou constitution naturelle du gouvernement le plus avantageux au genre humain*, 1768. "Physiocratie" なる文字が用ひられたのは是を以て嚆矢とする。
- 註三 Charles Gide et Charles Rist, *Histoire des Doctrines Économiques depuis les Physiocrates jusqu'à nos jours*, 1926, p. 6.
- 註四 John Kells Ingram, *A History of Political Economy*, 1919, p. 52. に據れば、フィジオクラフトの學説をスキムスの學

説と共に「自然的自由の學説」なる標題の下に取扱つてゐる。尙ほ多くの古典派經濟學者が彼等の目して明白なる誤謬を倣せるケネーの重農論を想せるのも、皆是ケネーの自由主義思想を斟酌したればこそである。要するに、フィジオクラフトの根本思想中、其の自然法思想は重く重農思想は輕しとせられてゐる。

- 註五 René Gonnard, *Histoire des Doctrines Économiques*, De Platon à Quesnay, 1924, p. 177. 參照。
- 註六 René Gonnard, *Histoire des Doctrines Économiques*, De Quesnay à Stuart Mill 1927, p. 34. 參照。
- 註七 英國のマーカンチリスムが商業的特徴を有し、西班牙の其れが地金主義であるに對して、佛蘭西のホルベリスムは工業的特徴を有する。其れは佛蘭西が自國の鐵山を有せず、且つ國民が勞働的なるが故に、自國工業の發展に依る金銀獲得政策に主力を注いだ事(Gonnard, *Histoire*, etc., De Platon à Quesnay, p. 140) を、搦て加つて貴族の反抗勢力を弱める爲に、王室が、土地貴族に有利な農業よりも、新興都市を富ます商工業を助成した事に由る。従つて其の結果勞働を可及的低廉に購入する爲に農業を犠牲にした事は必然の勢であらう。
- 註八 Higgs, *The Physiocrats*, 1897, p. 5-11. 參照。
- 註九 Arthur Tilley, *The Decline of the Age of Louis XIV*, 1929, chap. III, p. 45-74, La Bruyère. 參照。
- 註一〇 一六九〇年と一七一五年との間だけで饑饉や貧窮のために死んだものゝ數は全人口の約三分の一、即ち六百萬を評價せらるゝ。(Taine, *L'Ancien Régime*, vol. I, p. 430) 此れは勿論誇張であるとしても、當時の農民の窮乏の甚だしきことは疑ひなし。(Michellet, Jules, *Histoire de France*, Au Dix-septième siècle, Louis XIV et Le Duc de Bourgogne, 1899, p. 113-136. 參照)
- 註一一 *Oeuvres de Fénelon*. Édit Firmin, Didot, 1835, Tome III, p. 444. Ch. Urbain, *Écrit politique de Fénelon*, 1921, p. 143.

ボアギェルベールの「富の本質論」

- 註一四 Jacques Lelong, Bibliothèque historique de la France, etc. 1769. 今本書中其の主なるもの二三を擧げれば次の如し。
Le Trésor des Trésors de France volé à la couronne par les principaux officiers de finance, découvert et présenté au roi Louis XIII, par J. de Beaufort, 1615. La chasse aux Larrons ou Etablissement de la Chambre de justice, où se fait une démonstration des larcins des financiers et de la justice des poursuites que la Chambre de justice fait contre eux, par Jean Bourgoïn. Paris, 1618. Nouvelle école publique des finances ou l'Art de voler sans ailes. Cologne. 1708. Les partisans démasqués ou suite de l'Art de voler sans ailes, Cologne, 1709. L'Art de plumer la poule sans crier, Cologne, 1710. Adolph. Bianqui, Histoire de l'économie politique en Europe etc., 1837. Tome II. p. 389-472. 以下其の「詳掲載せらる。」
- 註一三 Herbert, Essai sur la police générale des grains, 1753.
- 註一四 Dupin, Mémoire sur les blés, 1748.
- 註一五 Goudar, Les intérêts de la France mal entendus, 1757.
- 註一六 ケネーの最初の經濟學的論文「小作人」(Fermiers)及「穀物」(Grains) (共に一七五六年及一七五七年にデイデロの「百科辭書」に寄せたるもの)は何れも農業經濟、殊に小作人問題を論じたものである。同論文の内容は後に述べる。
- 註一七 Du halde, Description de l'empire de la Chine, 1735.
- 註一八 René Gonnard, Op. cit. p. 14-16.
- 註一九 龍本誠一博士「日本經濟史」(増補新版)四一七頁—四一八頁
- 註二〇 Higgs, Op. cit. p. 4.

註二一 高橋誠一郎「經濟學前史」二九頁

註二二 Hector Denis, Histoire des Systèmes Économiques et Socialistes, 1904, Vol. I, p. 107.

註二三 F. rmiers (Auguste Oncken, Oeuvres Économiques et philosophiques de F. Quesnay, Paris, 1818, p. 159-192) 参照。

註二四 Grains (Ibid., p. 193-249) 参照。

註二五 同論文に「シニョイ氏の王國經濟の拔萃」(Extraits des Economies royales de M. de Sully) なる題下の「農業王國政治の一般的格言」(Maximes générales du gouvernement d'un royaume agricole) なる箴言集が附されてゐることは周知のことであらう。

註二六 此等の論文小冊子は、René Gonnard, Histoire des Doctrines Économiques, De Quesnay à Stuart Mill, 1927, p. 22-23. note 2. 及び前掲 Oncken, Oeuvres, etc. p. 145 以下に擧げられてゐる。就いて見られ度し。

註二七 フイジオクラートの思想の發展経路を筆者は次の三期に大別し得ると思ふ。

第一期——ケネーの重農思想。茲では主として、極めて卑俗的に行はれた現實の觀察に専心して、實證的分析を行ひ、實際問題を精細に研究した。

第二期——ケネーの自然權思想。茲では農業思想を經濟學的思想に、經濟學的思想を社會學的及形而上學的思想に敷衍したが、然し尙依然として農業的及實證的研究の色彩を帯びてゐた。

第三期——ケネーの思想の熱心な解説者たる、メルシェ及びデユボンに依る、ケネーの思想の發展の時代。茲で最初ケネーに於いて自然法思想よりも寧ろ重農思想が主であつたのに反して、逆に重農思想よりも自然的秩序の思想乃至自由主義の思想が主なるに至つた。

註二八 Dubois, Préface à la réédition du livre de Le Mercier, p. VII-VIII.

ボアキェンペールの「富の本質論」

註二九 瀧本博士前掲書、四一八頁

二

ボアギェルベール (Pierre le Pesant, sieur de Boisguillebert) (註三〇) は一六四六年二月十七日を以てルアン (Rouen) に生れ、一七一四年十月十日同地に於いて歿するまで、其の七十餘年の生涯を通じて、一にアンシャン・レジム及びコルベルチスムに對する完膏なき批判と其の缺陷及び悪弊に對する痛烈なる駁撃とのために、殆ど寧日として無かつたものである。洵に、彼は「十分一稅論」の著者ボーヴァンと共に、路易十四世治下に於ける「頭の天邊より足の爪先まで改革者たりしものである。」(註三一) 然かも其の統計的著述「佛蘭西詳論」(Détail de la France) (註三二) 及び「佛蘭西の辯護」(Factum de la France) (註三三) に於いて、陰鬱な筆調を以て路易十四世治下の暗黒慘憺たる社會相を描寫し、而して稅制改革の急務を主張した彼は、其の學理的著述たる「穀物の性質、耕作、商業及び利害に關する論叢」(Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des grains) (註三四) 及び就中「富、金銀及び租稅の本質に關する論評」(Dissertation sur la nature des richesses, de l'argent et des tribus) (註三五) に於いて、時弊の全くマーカンチスムの所産たるを指摘し、是が批判を行ひ而して是が徹底的反對者たるの旗幟を鮮明にし同時に重農的自由的思想を力説したのである。此の最後の著書は副題として「本書に於いて吾人は是等三物(富、金銀及び租稅)に就いて世に廣く行はれてゐる謬想を發見する」との數語が附加せられてゐるが、實に、本書こそ學說上に於ける革命の必要を聲高く豫告せる觀あるものであり、而して又ボアギェルベールを以てフイジオクラアトの始祖ケネーの直接の先蹤と做し且つ自由主義經濟學の創設者中に數へらるゝに値すると做すことの誇張にあら

ざる所以も亦専ら本書に存するのである。(註三六) 故に、本稿は主として本書中に現れたる彼の經濟思想を特に其の財富論及び貨幣論を中心として敘して這點に於いて及び又重農的自由的思想に於いて如何に彼がフイジオクラアの先驅的思想を表明したるかを明かにするを目的とする。

註三〇 或は Bois-Guilbert を綴り、又或は Boisguillebert を綴る等、彼の姓名の綴は當時の諸書類及び公文書に至る迄種々様々である。彼の弟及び其の他の家族の者は多く Boisguilbert を綴じた様である。然しルアン小教區民簿の、今日の官業にて所謂「身分證書」の多くには殆ど必ず Boisguillebert を記名せられ、且つ彼自身の書翰にも殆ど常に同綴りにて記名せられた様である。(Félix Cadet, Pierre de Boisguillebert, Paris, 1871. の開巻第一頁に掲載せられた、彼の書翰の一部の模寫參照)

註三一 Paul Louis, Histoire du Socialism: en France, etc., 1925, p. 23.

註三二 ボアギェルベールの青年時代の文學作品を除き、彼の經濟學的著述に就いて觀れば、本書は其の最初のものである。本書の初版は Détail de la France ou Traité de la cause de la diminution de ses biens et des moyens d'y remédier. なる題下に「一六九五年ルアンに於いて出版せられ、著者の名として M. de S なる文字を用ひた。(LeLONG が其の Bibliothèque historique de la France, etc., Paris, 1769. Vol. II, p. 825. に記載せるは即ち此の刊本である) 次いで其の翌年に本書の一種の摘要を思ふ可きものが「La France ruinée sous Louis X V, par qui et comment, sur les moyens de la rétablir en peu de temps. なる題下にロマンヌに於いて出版せられた。次いで第三版は Le Détail de la France, la cause de la diminution de ses biens, et la facilité de remède, en fournissant en un mois tout l'argent dont le roi a besoin et enrichissant tout le monde. なる題下に「一六九七年に出版せられた。(Daire が其の Collection des principaux Economistes, 1851, Tome I, p. 163-241. に採録したのは即ち本版であり、圖書及び傳記に關する諸辭書ボアギェルベールの「富の本質論」

書も大抵本版を擧げしむる) 尙 Le Detail de la France sous le règne de Louis XIV. (1卷二百十頁) なる表題の
一六九九年なる出版年號を有する別卷がある。J.-E. Horn, L'économie politique avant les Physiocrates, 1867, p. 70.
の考證に依れば、恐らく、本書は偽書にあらざるやを疑はれしむる。

註三三 本書の全表題は次の如し。Factum de la France, ou moyens très faciles de faire recevoir au roi quatre-vingts millions
par-dessus la capitation, praticable par deux heures de travail de M. M. les ministres et un mois d'exécution de la part
des peuples, sans congédier aucun fermier général ni particulier, ni autre mouvement que de retablir quatre ou cinq
fois davantage de revenu à la France, c'est-à-dire plus de 500 millions sur plus de 1,500 anéantis depuis 1661, parce
qu'on fait voir clairement, en même temps, que l'on ne peut faire d'objection contre cette proposition, soit par rapport
au temps et à la conjoncture, comme n'étant pas propre à aucun changement, soit au prétendu péril, risque, ou quelques
autres causes que ce puissent être, sans renoncer à la raison et au sens commun; en sort que l'on maintient qu'il n'y a
point d'homme sur la terre qui ose mettre sur le papier une pareille contradiction et la souscrire de son nom sans se
perdre d'homme, et qu'on montre en même temps l'impossibilité de sortir autrement de la conjoncture présente.

本書は著者自ら本書の劈頭に於いて「十年前に... Detail de la France」題する一書が公にせられた」とする
所より推して大體一七〇四年頃に書かれたものと察せられる。本書の出版は普通一七〇七年とせらるゝも、遅く共
一七〇六年より遅るゝ筈無かりしものであり、現にQuérard等は一七〇六年ルアンに於いて出版せられた刊本を引
用してゐる。次いで本書は一七〇七年、ボアギェルメール全集刊行に際して、彼の「佛蘭西詳論」及び其の他の彼
の著書と共に公にせられた。此の全集には二種あり(其一七〇二年刊行)、其の一は Œuvres complètes de Boisgu-
ilbert であり、他の一は Testament politique du Maréchal de Vauban. なる題下にボアギェルメールの諸著を集録

せるものである。そこで問題は、此の二つの全集、即ち名實共の「ボアギェルメール全集」と、彼の諸著を「ボ
グマン將軍の政治的遺著」の題下に集録せるものとが、然かも同時に、刊行せられたことを如何に解す可きかを云
ふことであるが、此れに關する考證は前掲 Horn, L'économie politique, etc., p. 73. に詳細である。たゞ茲に興味あ
ることは、此の Testament politique, etc. の刊行に依つて誤らされた人が當時相當に多く存し遂には、或はボグマ
ンを以てボアギェルメールの諸著の著者なりと做し、又或はボアギェルメールを以てボグマンの「十分一稅論」の
著者なりと做すに至つたことである。(例へばホルテイルは其の著 Dictionnaire Philosophique, Tome. 1, p. 100. に
於いてボアギェルメールを以てボグマンの「十分一稅論」の著者なりと做せるが如し) 尙 Daire, Notice sur Bois-
guillebert (Collection des Principaux Économistes, Tome I. 1851, p. 160) に依れば「此の時(一七〇七年頃)以來、
ボアギェルメールは其の筆を休めた儘であつた。然し彼は死ぬ迄彼が單に正當且つ有益なる思想を表明したに過ぎ
ぬことを強く信じてゐた。世間の無關心が著者としてよりも寧ろ市民として彼には惱ましかつた。そこで此の爲に
彼は一七一二「ボグマン將軍の政治的遺著」なる偽の題下に、其の全著書の新なる刊行を行ったのである。彼
は偉人(ボグマン)の名が實際 passe-port をして役立つ事を期待したのである。」と。此の一七一二年の「ボグマ
ン將軍の政治的遺著」が再版たることは Horn, Op. cit., p. 72-73. の指摘する所である。

尙 Horn, Op. cit. p. 75-76. に依れば「Factum は「附録」を有するものなるを Daire (Collection, etc., Tome
I, p. 241-247) が 此れを Supplément au Detail de la France として Detail の後に附するは明かに誤りとして、此れ
は Supplément au Factum de la France として Factum の附録たるべきものとせらるゝ。

註三四 本書の全表題は次の如し。Traité de la nature, culture, commerce et intérêt des Grains, tant par rapport au public qu'à
tous les condition d'un Etat; divisé en deux parties, dont la première fait voir que plus les grains sont à vil prix.

ボアギェルメールの「富の本質論」

plus les pauvres, surtout les ouvriers, sont misérables; et la seconde, que plus il sort du blé du royaume, et plus il se garantit des finesses effrés d'une extrême disette. 本書は其の内容に依つて大體一七〇四―五年の間に編集せられたものなることが明かである。

註三五 本書の出版は *Traité de l'usage des monnoies* の出版との間、即ち恐らく一七〇五年頃であらう。然し *Traité de l'usage des monnoies* にせよ、何れも初版は確知せられなす。彼等は「一七〇七のボアギェルベール全集中に復刻せられ、*Daire de l'usage des monnoies* Collection, etc.」に採録したる云はれしもの (Horn, Op. cit. p. 78)

尙別にボアギェルベールの著書に *Traité sur le mérite des financiers* (*Daire* は此れに就いては一言だにせず、前掲 *Collection*, etc. Tome I. p. 152-3 参照) 及び *Causes de la rareté de l'argent, et éclaircissements des mauvais raisonnemens du public à cet egard.* (*Daire*, *Collection*, etc., Tome I. p. 153) がある。

註三六 Joseph Rambaud, *Histoire des Doctrines Économiques*, 1902, p. 129.

三

ボアギェルベールは其の著「富、金銀及び租税の本質に關する論評」の劈頭に於いて云ふ、「萬人富者たらんと欲す、多數者が日夜儼然として勞働する所以のものも一に富者たらんが爲に外ならない。然し人々は此れに首尾よく成功せんが爲に取る方法に於いて常に誤つてゐる。永久不易たり得べき富の眞の獲得に於ける、此の誤は、先づ人々にして富裕 (opulence) 及び金銀 (argent) に就いて爲せる考へに於いて誤れる事から生ずるのである。」(註三七) と。

洵に、萬人汲々として富を求むれども、然かも富の何たるかを識れる人は尠い。人或は富を以て金銀の所有に在

りと做す、然し金銀が眞の富であらうか。ボアギェルベールに依れば、金銀は精々富の要具たるものである。然らば眞の富とは何か。彼は之に答へて云ふ、「眞の富とは、常に生活の必需品のみならず、又凡ゆる奢侈品並に官能を喜ばせ得る凡ゆる物の全き享有に在る。」(註三八) と。

斯かる財富觀から出發せるボアギェルベールに取つては必然當時の「人々が日夜偶像として崇拜せる、金銀は：衣食に適せざるが故に、それ自體にては斷じて何等の用途を有するものではないのである。」(註三九) 彼は此れを例證して云ふ、「夫の新大陸發見の西班牙人の物語に依つて、其の最初の征服者は、縱令金銀にして樽を以て計量せらるゝ程の一地方の絶對的支配者たりしと雖も、多年間いとも慘めに其の生活を送り、其の多數者の餓死せるは別としても、殆ど其の凡ての者は惟だ僅かに自然の與ふる最も惡しき且つ最も厭ふ可き食物に依つてのみ這般の窮境より免れたに過ぎなかつた事は餘りにも確實な事實である。洵に「鑛山の所在地に於いて、若しも消費貨物が缺乏せんか、人は一日に五十エクターを消費するも尙、彼が匈牙利に於いて僅かハスウ若しくはナスウを以てするよりも遙かに不便不快に生活せざるを得ないであらう、何となれば匈牙利に於いては、這般の僅かな金額を以て必要若しくは快適の凡ゆる物品を豊富に享受するに殆ど充分なるが故である。」(註四〇) されば西班牙は歐羅巴の諸他の國々よりも遙かに富裕なるものでは斷じてない、蓋し其の船隊は年々其の植民地より多額の金銀を本國に齎すと雖も、然かも「此の金銀は其の殆ど全部を舉げて、鑛山所在國に齎す可く生活必需品を生産せる國々に、持ち行かねばならぬからである。」(註四一) 若しも金銀を收受せる人々が全然それを保藏し以て他の如何なる享樂物件とも交換する事を得ないものとするれば、「特に人間を養ふことに關する限り、世に此れ程卑しめらる可き物件は他に無かるべく、斯くて其の如何に多量に存するとも、人嘗てそれを尊重する事は無いであらう。」(註四二)

斯くてボアギユルベールに依れば、金銀は、社會が未だ物々交換の状態に在つた時、即ち人口稀薄、欲望僅少、従つて是に應ずる生産物も亦多大なるを要せざるに因つて、可讓的物件の相互的直接交換に依つて有無相通じ得た時代には、何等の職能無く従つて何等の價値の無かつたものである。然るに、這般の状態は、三四種の職業が生起し斯くて先づ人々の勞働が分割せられ、更に職業數が漸増して「麴麴屋、仕立屋等の如き最も緊要のものより俳優に至るまで……自然に依つて最も良く分割せられ而して最も開化せる完全なる國家を構成せる二百余种の職業」(註四三)が現るゝに至るや、最早其の存続を維持し得るものではない。何となれば今や需要と供給とは愈々増大し、愈々複雑化するに至れるが故に、最早や直ちに兩者の一致を見る事を得ざるに至る可く、即ち他人に讓渡すべき余剰生産物を有する人が、此の生産物を欲求し而して其の代りに彼の欲求せる生産物、享樂乃至勤勞を提供し得る人を直ちに見出す事を得ざるに至るからである。斯くて一生産物の賣手が彼が現實に欲求せる生産物の賣手と直接取引せざる事の愈々頻繁となる時、彼が讓渡する物件の補償として、茲に金銀は役立つに至るものである、而して彼が其の買手より受取りたるもの(金銀)は彼に取つては一種の保證附委任狀(une procuration, avec garantie)にして、彼の欲望は(彼の欲求せる生物の)賣手が見出さるゝ場合に實現せらるるものである、而してそれは……彼の掌中より彼の所有に屬せし生産物が讓渡せられた時の價格乃至其の時の價格に比例せる價格に於てである。(註四四)

「故に金銀が世上に要求せられたのは、惟だ高々交換の保證としてであるに過ぎない、(註四五)それは引渡が直ちに實現せられざる時及び又言葉若しくは書狀に依る引渡の保證に對し、買手に於いて充分の支拂能力が存せず若しくは其の現はれざる時、惟だ將來引渡の保證(Le gage de la tradition future)たるものに過ぎず又當に過ぎざるべきものである。(註四六)されば、それは謂はゞ一種の彌縫具たるべきものであるに拘らず、應て最も偏愛せらるゝものとなつたのである。何故か。快樂を欲し然かも其の快樂を満足せしむるために其の全生活に殆ど充分なる余裕を有せざる輩は、然るべき時季に然るべき時價にて賣却せんが爲に、穀物及び其の他の土地生産物を以て其の家屋及び倉庫を満たして置くことなどには留意せざるものである。斯かる配慮、希望、乃至心配は彼の如き生活には適せざるものである。即時現金ならば、然る可き販賣價額の半額以下、否其の四半額にても、能く彼の用を辨するものである……(註四七)他方、何等か快適物件の所有者は是を金銀と交換し、以てそれだけ彼等の財産を保持し易からしめんとするであらう。斯くて、人々が金銀を渴仰するに至れる結果は、嘗て「此の世の二人の最初の勞働者であり、同時に二人の君主であつた」時代、即ち「其の一人は穀物を得るがために地を耕し、他は着物を作るがために羊を飼ひ、而して彼等の爲し得たる相互的交換が彼等をして互の勞作物を互に享受せしめた」(註四八)時代は茲に一變して「犯罪と暴行とは、時と共に、増加し、最強者たる者は何物をも爲さんと欲せずして、然かも最弱者の勞働の結果を享樂し、斯くて神の秩序に全く反くに至るのである。而して此の墮落がいとも過度になつたが故に、今日人々は完全に二箇の階級に分たるゝに至つたのである、何等爲す所無く然かも凡ゆる快樂を享有する階級と、日夜勞働すれども、然かも殆ど必需品すら所有する事無く、否時に全然其れすら剝奪せらるゝ事のある階級とは即ち是である。これ金銀が其の本來の用途に抵觸し初むる傾向を帯ぶるに至つたためである。即ち……金銀が其の他の凡ゆる生産物に對して保有して居る可き均衡が、應て甚大なる打撃を受けたからである。」(註四九)

洵に、人が金銀を尊重し而して凡ゆる種類の消費貨物を蔑視することは、恐ろしき程に金銀と凡ゆる種類の物件との間に當に在る可き均衡を攪亂するものである。人が金銀取立ての爲めに持つ苛酷と其の他の一切諸物に就て爲

才浪費とは、前者をば雲の上まで上げ崇め而して後者をば奈落の底まで下げさげすむものである。(註五〇)斯くて事物の地位は全く首尾顛倒するのである。交換に仕ふ可き金銀が一切を支配する。即ち「今や交換の奴隷は其の暴君となつてしまつたのである。(註五一)」然かもそは凡そ吾人の想像し得る最も残酷にして且つ最も貪慾なる暴君となるに至つたのである。貧乏なる「古代の諸邪神に對して人々は凡ゆる物を生贄に捧ぐるを常とした。即ち此神に對しては禽獸を、彼神に對しては果實と酒類とを、而して極り無き無分別の事には、不幸にも或る人命をすら奉獻した：：(註五二)」夫の古代フェニキヤのカナンの民が子供を生贄に供したモロック(Moloch)と云ふ偶像は殊に貪慾極り無き惡魔であつた。ボアギェルベールに従へば、金銀は正に此の魔像モロックの如く否それ以上に残忍にして貪婪なるものである。人々は常に金銀に對して、少しでも金銀に嫌はれる貨物は一切之れを献上せず、若しも金銀の寵遇を贏ち得んと欲するならば、不動産を献上しなければならぬ、然かもそれとて廣大且つ豊饒極り無き土地でなければならぬ。嘗て最も高價なりし、顯位顯官、否縱令一地方全體すら金銀に取つてはさまで十分なるもので無く、寧ろ惟だ其の貪慾を啖るに過ぎぬものである。而して、人間の生贄はと云へば、凡ゆる天災が、最も強く結合し且つ最も激しく狂怒した時と雖も、金銀が生贄に供せしめたる程多數の人間を破滅したことは嘗て無かつたのである。(註五三)

幾多の犯罪は金銀に依つて始めて可能となる。少く共非常に容易となるものである。例へば竊盜の如きこれである。何となれば「若しも凡ゆる財産が生活に必要な貨物に限られてゐたとすれば、盜賊は：：一度には唯少量の財貨のみを掠奪し得るに過ぎず、然かもそれを持ち去らんがためには、隠し得ざる多くの馬と車とを要するものである(註五四)が、金銀の存在は這般の不便を除去するからである。又例へば、掛にて買つた商品をば廉價、但し現金

にて即時に轉賣し、而して其の賣上金額を持つて逃亡する所の、商人の詐欺的破産の如きも金銀が存在すればこそ行はるゝものである。(註五五)更に例へば、租税に就いて行はるゝ多大の不公平及び暴戾の如きも亦金納なるが故である。即ち金納税なればこそ屢納税力以上に徵税せらるゝ事があり、且つ概して一片の土地の所有者が其の隣の大地主よりも遙かに重く課税せられてゐるのである。若しも金銀が存在せず、而して租税が物納であるとすれば、三十スチエの小麥を收穫する人が其の中四十スチエを政府に納税することや、二十スチエの葡萄酒を收穫する葡萄栽培者が其の中十スチエを十分一税として提供してゐるのに、二百スチエの葡萄酒收穫者が僅か二スチエの納税を以て義務を免かれてゐるが如きことは斷じて常識では云ひ得ざる所である。(註五六)

金銀の弊害はこれだけではない。謬見に因る金銀の過度の尊重は又凡ゆる交易をも顛覆するものである。由來交易は平衡を以て其の本義とするものである。萬人が其の勞働の所産を現金と交換し而して其際生産の勞苦に對して正當なる利潤を獲得する事を得、續いて彼等が其の讓渡物件の代りに、其の渴仰せる物件を獲得する事を得るが爲には、各物件の價格が人爲的に暴騰せしめられず、又暴落せしめられざる事を要するものである。然るに、金銀の過度の尊重は全く這般の平衡状態を破壊するものである。

金銀を過度に尊重する場合に於て、就中小麥の蒙る影響は大である。ボアギェルベールに従へば、當時小麥の價格が其の生産費を補償し得ざる點に迄引下げられた事は屢であつた。されば、此の不平衡の下に農業の衰微するのは明かであり、然かも其の反動は臆て必然商工業等諸他の産業部門をも強く襲はずんば已まざるものである。斯くて金銀が餘りに高く評價せらるゝ結果は一切諸物の價值が低下せられ、一切諸物の價值が低下せらるゝが故に一切は衰亡するのである。洵に「這邊にこそ紊亂の原因も又紛亂の本體も存するのである。(註五七)」が、然かも人これ

に氣付かざるが故に、遂には「萬物の豊富の眞只中に在つて極り無き貧困を醸成するに至るのである。」(註五八) 茲に於てか、金銀の齎す弊害は其の得しむる利益よりも遙かに大であると結論し得べきである。ボアギェルベールに從へば、金銀に二種ある。其の一は argent bienfaisant にして、これは世上に於いて其の天與の使命に服し而して常に交易に仕へんとするものであり、吾人が攪亂せざる限り、聊も交易をば攪亂せんと欲することなきものである。(註五九) 即ち交易の奴隸としての金銀である。然るに「他の一は argent criminel なるものである。」「これこそ奴隸たらずして神たらんと欲せるものであり、個人に對し否全人類に對して鬪を宣したる後、遂には玉座にまで上る」(註六〇)ものである。而して今日存在する金銀は正に此の後者である。即ち、本來「惟だ商業乃至交換を容易ならしむるためにのみ採用せられたに拘らず、今や萬物に對する死刑執行人となれる、fatal metal である。」(註六一)

註三七 Dissertation sur la nature des richesses, chap. I. Daire, Collection des Principaux Economistes, 1851, Tome I. p. 372.

註三八 Ibid. ch. p. IV, Ibid. p. 383.

註三九 Ibid. chap. II, Ibid. p. 374.

註四〇 Ibid. chap. I. Ibid. p. 372-373.

註四一 Détail de la France, chap. XVII, Rare, Op. cit. p. 198. 尙茲に興味ある事はボウマンが其の「十分一稅論」の劈頭に於て「金銀を富を混同せる當時一般の偏見を辯駁したのも亦ボアギェルベールと殆ど同一の言葉を以てし且つ同様の例證を援用したことをみる。」(Daire, Collection, etc., p. 50-51)

註四二 Dissertation, etc., chap. II. Daire, Collection, etc., p. 375.

註四三 Ibid., chap. IV, Ibid., p. 385.

註四四 Ibid., chap. II. Ibid., p. 375.

註四五 Ibid., chap. II. Ibid., p. 375.

註四六 Ibid., chap. IV, Ibid., p. 384.

註四七 Ibid., chap. III, Ibid., p. 378.

註四八 Ibid., chap. III, Ibid., p. 377.

註四九 Ibid., chap. III, Ibid., p. 377-378.

註五〇 Ibid., chap. III, Ibid., p. 378.

註五一 Ibid.

註五二 Ibid., chap. V, Ibid., p. 395.

註五三 Ibid.

註五四 Ibid., chap. III, Ibid., p. 378.

註五五 Ibid., chap. III, Ibid., p. 378-379.

註五六 Ibid., chap. III, Ibid., p. 381.

註五七 Ibid., chap. IV, Ibid., p. 386.

註五八 Ibid.

註五九 Ibid., chap. VI, Ibid., 399.

註六〇 Ibid.

註六一 Ibid, chap. V. Ibid., p. 394.

四

若しも惟り貴金屬のみが絶對的必要に應じ得る唯一のものとするれば、其の弊害も從順に承認すべきである。然しボアギェルベールに従へば、貴金屬が唯一の絶對的必要に應じ得るものではないのである。然らば「金銀を免職し」(註六二)其の負へる職能をば何等か他の物件に移す事に依つて「金銀を不用且つ不動たらしめて置き其の凡ゆる誇りを閉ざす事を餘儀なくせらるゝであらう。」(註六三)然もそは洵に易々たる事である。彼は云ふ、「銅及び青銅は、人は是を以て多量に貨幣としてゐるものであるが、彼等は能く金銀に代位し得るものではないか。或る場合に於て、人は屢皮を以て貨幣としたではないか、然かもそは皮其物には何等の價值とて無いが、皮面にある君主の銘刻に依つて、金銀と等しき力、等しき利便を有せるものである、何となれば、そは秘露(Pearl)及び新大陸に於ける多額金銀より以上に生活必需品を得しめたからである。マルディヴ(Maldives)諸島に於ては、其の住民は種々の物語に依つて知られ得るが如く、文明且つ華美にして、斷じて野蠻ではないが、其處では小囊に容れて授受せらるゝ、或種の貝殻が、…金銀と等しき力を有し、且つ金銀と等しく其の住民の買はんと欲する物件の將來引渡の保證を得しむるのである。…亞米利加の諸島は、縱令金銀が豊富なるに拘らず、久しく日常の取引に金銀を使用することを知らずに居た…。唯煙草のみが凡ゆる取引に用ひられて居た…。即ち若しも人が約一スウ分の麵麩を買はんと欲した時には、彼は一定の價格を有せる、此の土地の産物(煙草)の同額分だけを與へたのである、而して此の煙草に就いては、恰も何れの國に於けるを問はず、其の通貨に就いてと同様、何等の異議も無かつたのである。然

かも、斯く唯煙草を用ひただけで、必需品、快適品及び奢侈品も他所に於けると等しく毫も缺如することはなかつたのである。(註六四)

更にボアギェルベールに従へば、金銀無しに濟ますためには、貝殻、皮、乃至煙草すら備ふる必要がないのである。即ち「歐羅巴には：遙かに簡易にして且つ遙かに廉價なる一手段があり、而してそれが毎日實施せられてゐるのである：…即ちそれは金銀に對抗せしむるに、前述せるが如き、徴集の勞苦を要する、皮、貝殻乃至煙草を以てせずして、實に何物にも値せざる一片の紙片を以てすることこれである、然もそれにも拘らず此の紙片は何百萬となく、否無限に、即ち此の紙片の流通する人の數だけ、金銀の凡ゆる職能に代位するものである：…斯くして其處には毫も金銀の助力を俟たずに、普遍的富裕、即ち財貨の大なる享有と消費とが存するのである。(註六五)

故にボアギェルベールに依れば、金銀は富の本質たるどころか、其の片影ですらないのである。一國が農業に依つて繁榮すること愈々大なれば、金銀が渴望せらるゝことは愈々小となるであらう。否人々は金銀を欲することすらないであらう。金銀が珍重せらるゝのは繁榮の反對たるものである。富裕時に於ては、家に金銀が入り来るや否や、人はそれを支出せんと考へた。斯くて金銀は、恬然として、同一日に屢百軒以上の家を循環すること、換言すれば貧困時に於けるよりも百倍も多い消費従つて所得を生ぜしむる事を常とした。(註六六)然るに貧困時に於ては、金銀は龜の歩むが如く徐々に循環し、而して事件の偶發は金銀の循環をして愈々緩徐たらしむるに資するのみである：…斯くて金銀を支出せしむるためには非常な工夫を必要とするも、然も概してそれは勞力と時間との空費たるのみである。(註六七)又「如何なる理窟を以てするも：…此の金銀を少しでも循環せしむるには多くは無効である。(註六八)否益々「人々は費用を節減するのである、而してそれが貧困、従つて金銀の稀少を増大する不幸の源

泉となるのである。(註六九)

故に、金銀が缺如せるが故に貧困であるのではなく、貧困なるが故に金銀が缺乏してゐると云ふべきである。然らば何が故に貧困であるのか。ボアギェルベールに従へば、それは一に金銀が循環しないからである。洵に、其處にこそ致命的窮乏の原因が存するのである。然らば又何故に金銀は循環しないのか。彼に従へば、富時に於ては、金銀は其の正常の價值通りに評價せられてゐるが「貧時に於ては、惟り金銀のみが富であり又富であると稱せられ、爾餘一切諸物は單に塵埃」(註七〇)、即ち無價値物たるに過ぎぬと做され、斯くて人々が擧つて惟り金銀のみを愛蔵するに至るからである。然し金銀は可動なることに依つてのみ金銀たり得るのである。それが不動となるや否や、それを世上に再び齎し……若しくは……此の金銀を商業に投入することが保證せられなくなるからそれは金銀たり得ざるに至るが故に……吾人は一切が失はれると云ひ得るのである。(註七一)即ち金銀の缺乏は貧困の結果でこそあれ、斷じて其の原因ではないのである。されば貧困を防止せんがために、國內に金銀を誘致し而して其の國外に流出するを阻止せんと工夫するは徒勞である。反マーカンチリスト的思想家としての彼の面目洵に躍如たるものがある。

註六一 Dissertation, etc, chap. II, Daire, Collection, etc., p. 375.

註六三 Ibid.

註六四 Ibid. p. 375-376.

註六五 Ibid., ch. p. II, Ibid., p. 376-377.

ボアギェルベールが金銀に代位せしめんとした「一片の紙片」とは、一種の商業手形にして、本來の意味に於ける兌換券ではない。即ち彼が「世間周知の確固たる富に依つて築かれた絶大の信用を有する知名の商人の手形」

(Ibid. p. 376)云々を云ひ、又「リヨンの大市を構成せる八千萬以上の販賣及び轉賣取引に於て、吾人は一スウの現金の片影すら嘗て見たことがない。凡ゆる取引は爲替乃至手形に依つて行はれ、而してそれは無数の人手を経た後結局其の最初の振出人の許に歸るのである」(Ibid. p. 377)と云へるは皆商業手形のことである。斯くて彼は一種の手形交換所の制度の擴充に依る、商業手形の普遍的流通を欲求し且つ推賞したのである。尙ほ「是等の手形……を有效たらしめる生命は、其の振出人の確固たる支振能力であり、而して其の支拂能力は、動産不動産を問はず彼の財産の現價值に絶対に歸着するものである」(Ibid. p. 394)と云へる所より彼が無法なる商業手形の亂發を戒しめてゐたことは明らかである。

註六六 Dissertation, etc, chap. V, Daire, Collection, etc., p. 394.

註六七 Ibid., p. 395.

註六八 Ibid.

註六九 Ibid.

註七〇 Ibid.

註七一 Détail de la France, chap. XIX Daire, Collection, etc., p. 201.

尙マルクス「經濟學批判」(猪俣津南雄譯、マルクス—エンゲルス全集第七卷第五二頁)參照。

五

以上筆者は可成り詳細に互つて大體「富の本質論」中に現れたボアギェルベールの反マーカンチリスト的經濟思想

ボアギェルベールの「富の本質論」

想を叙述した。彼の所論の根幹は、明らかに、マルクスも指摘せるが如く、(註七二)金銀貨幣に對する熱狂的な攻撃と、是を以て斷じて富に非ず、單に交換要具乃至流通手段に過ぎぬと做せる點である。固より、富と金銀との概念の區別は、彼を以て嚆矢とすべきものでなく、溯れば既に「第十四世紀最大の佛國經濟學者」ニコラウス・オレスミウス、(註七三)否アリストテレス(註七四)の所論中に見出さるゝものであり、從つて「ボアギユルベールとボーヴァンとは、富は主として貴金屬より成るてふ、一般的思想を反駁した最初の著者である」と做すデール(註七五)の言は聊か當を失するものである。又這般の思想の表明は當時の歐洲に於いて彼が唯一のものでなく、是を外國に求むれば英國にベテイ、(註七六)獨逸にカスパアル・クロック、(註七七)伊太利にアントニオ・セルラ(註七八)及びバダヴィアにサルマックス(註七九)等を挙げ得やう。然し此等のことに依つて彼の學說的價値は聊かも失はるゝものではない。既述せるが如く、所謂反マーカンチリスト的思想の樹立にして凡そ當時の佛蘭西よりも必要にして且つ必然的なるものはなかつた。然かもゴンナアル(註八〇)の所謂マーカンチリズムの本質たる(一)重金思想(二)國家後見及干渉(三)貿易平衡主義(四)商工的組織統制々規、海運業及植民政策上の排他主義及び(五)國際的嫉妬は、其の悉くが當時の佛國政府の主張否殆ど國家の宗教となつてゐた。故に、斯かる主張否國教の愚劣且有害なるを指摘し、攻撃することは、縱令それが時代的要求であつたとしても、正に獨創的且勇敢なる思想家に非ざれば能く爲し得る所でなかつた。ボアギユルベールは正に鋭き批判と正しき認識とを以て此の任務を勇敢に果したものである。加之、彼の思想が纏てケネーを首領とするフイジオクラアトを通じて開花し以て自由主義經濟思想を生むに至つたことを想へば、彼の功績や洵に没す可からざるものがある。

然らば彼とフイジオクラアトとの關係如何。最後に此の點を一言して本稿を終らう。

既述せる彼の思想は殆ど其儘フイジオクラアトに依つて繼承せられたと見て差支無い。即ち彼等も亦金銀を以て惟り消費財を流通せしむることを職能とする機關に過ぎぬと做した。先づケネー曰く、「金銀貨幣は諸國民に取つて賣買間の媒介的保證 (sageintermédiaire) である。金銀はそれが財貨と財貨とを交換せしめる限りに於てのみ一國に在つて活動的にして且つ眞に有利なる富たるものである。何となれば貨幣は其れ自體に於ては賣買に使用せらるゝ以外に一國に於て他の何等の效用をも有せざる不生産的富たるに外ならないからである……」(註八一)と。又ルトローヌ曰く、「金銀は單に賣買の間に介在する保證 (sage) たるに過ぎぬ、そは商業の目的ではない。吾人が販賣に依つて金銀を獲得するのは單に購買に依つてそれを支出するがために外ならない。」(註八二)と更に又メルシエ曰く、「金銀は賣買される凡ゆる物を運ぶ謂はゞ河川である。」(註八三)と。斯くてボアギユルベールに於けると等しく今やフイジオクラアトに於ても亦金銀は單に交換要具と看做さるゝに至つたのである。

同時にフイジオクラアトに依れば、諸國民の眞の富は多額の金銀を有することに存せずして、此の金銀を購ひ得る價値を有することに存するのである。ケネー曰く、「一國民の富は貨幣の形態に於ける富の量に依て決せらるゝものではない……一國の富を決するものは貨幣の形態に於ける富の多少ではない。」(註八四)と。又メルシエ曰く、「富とは即ち享樂する手段」(註八五)即ち消費貨物であると。而して彼は貨幣の形態に於ける富と生産物の形態に於ける富とを對立せしめ、(註八六)「貨幣の形態に於ける富は其の代位せられたる第一次の富を表示する第二次の富に於ける富とを對立せしめ、(註八七)と做し、恰もボアギユルベールが奴隸(金銀)をして主人(消費財)の後から歩ましむるの至當を力説せるが如く、此の第二次の富を以て「第一次の富の後から歩む」(註八八)べきものと做してゐる。

斯くて彼等に依れば、金銀の無限の蓄積は無意義となる、何となれば以後金銀は消費財に從屬せしめられ、其數

量は其の遂行すべき媒介的職能に必要な限度に制限せらるゝに至つたからである。即ち従來何等の制限を受けてゐなかつた金銀は今や全く *organe conditionné* となるに至つたのである。(註八九)

然らば、斯くの如く、生活に有用なる、若しくは吾人の欲望を満足するに適切なる、凡ゆる物件と金銀との間の關係を顛倒せしめたフイジオクラアトが、其の注意を、消費財の社會に於ける生産及び分配を律する法則の探求に向くるに至つた事は必然の勢である。即ち、それは、一新見地に於ける、第十八世紀全般の特色たる自然への復歸である。而して斯く自然に復歸せる彼等の眼に先づ映じたものは、即ち社會人は外的物質界に從屬せるものであり而て彼は此の外界より凡ゆる物質を得るものであり、此の物質こそ彼の身體の不斷の維持發展及彼の物的並に心的欲望の満足に資するものであるといふ事である。斯くて彼等は物質を以て富の本質と思惟するに至るのである。而て彼等に從へば、此の欲望充足に資する物質は、先づ、外界より抽出せられ、變形加工せられ、次いで社會の全員に分配せらるゝものであり、茲に夫々の職能を掌る機關として農業階級(物質の抽出機關)、工業階級(加工機關)及び商業階級(分配機關)が存することとなるが、然も此物質の總量を増加し得る者は惟り農業階級のみなるが故に、彼等は是を以て唯一の生産的階級と做し、茲にフイジオクラアト獨特の重農論「純生産物」論は發生するのである。

然も、既に、吾人の觀たボアギェルベールの財富論より、彼が亦土地を富の源泉と做すに至れる事は極めて自然の歸結である。彼の財富論から重農論に達するには一步にして足るであらう。即ち彼はフイジオクラアトに先立つて、土地乃至農業の重要性を指摘して曰く、「一國の富は其土地と其商業とに在る。」(註九〇)「農業と商業とは凡ゆる國家の二大乳房である。」(註九一)「農産物の増加あつて初めて辯護士、醫者……は働き得る。従つて不毛の地方に此

の種の人々を殆ど見ざるに反して、然らざる地方には彼等は多數存在する。」(註九二)即ち「凡ゆる職業を活動せしむるものは農産物、殊に小麦である。」(註九三)と。

而して此の重要な農業を恢復するには、必然農産物、殊に小麦に其の生産費を補償し得る價格を得しめねばならない。彼の別著「穀物論叢」は正に此の急務なるを主張せるものであつた。即ち彼は同著の前半に於いて、凡ゆる貨物の充分高き且變動せざる價格こそ、生産者は固より結局消費者の利益たるを論斷して、(註九四)ケネーの「相當價格」説の先驅をなし、更に其の後半に於て、此の生産費補償價格が、國家的法規に依て獲らる可きものでなく、關稅の廢止と輸出の完全なる自由、要之、自由放任政策に依て獲らる可きものである事を強調して、實に又フイジオクラアトに先立つて自由主義者たるの旗幟を鮮明ならしめたのである。曰く、「常に自由と完全とに向ふ、自然に對する大なる侵害を止める事のみが必要である。」(註九五)「自然をして爲すに任せよ、」(註九六)「自然は惟だ自由のみを呼吸する。」(註九七)と。

依是觀之、フイジオクラアトの反マーカンチリスト的經濟思想(殊に其の反重金思想)と云ひ、重農思想と云ひ、將た自由主義思想と云ふ、曷是ボアギェルベールに於いて既に明白に表明せられたものではないか。吾人は彼に於てフイジオクラアトの諸思想を明確に豫見し得る。彼等がボアギェルベールを尊重したのも宜なる哉である。デュボン・ド・ヌムールは「ボアギェルベールが當時世人の知らざりしこと、即ち有效勞働の立替と商業の自由の利益とを重するの必要を既に知悉してゐた事の慧眼」に敬服した後附言すらく「若しも彼にして土地と水とが人間の勞働に依て富を引出し得る唯一の源泉である事を知つてゐたならば……若しも彼が純生産物の存在及び其の再生産費との區別を識り得たならば、又若しも彼が此等の眞理に加ふるに彼の既知の諸他の眞理を以てしたならば、吾人は彼

に経済學の諸原理の發明の名譽を負ふものである。(註九八)と。

然り。ボアギェルベールは勿論經濟學の建設者ではなかつた。然し這個建設事業は明らかに彼に始まつたと云ふ可きである。即ち「彼は這個建設に建多の貴重なる材料を運び且つ備へ而して廳てフイジオクラアトが其の上に彼等の記念塔を建設すべき素地の障壁を豫め除去するに於て大いに資する所ありしものである。」(註九九)マルクスが其の著「經濟學批判」(註一〇〇)に於て、佛蘭西の古典經濟學を以て、實にボアギェルベールに始まると做したのも洵に故なしとなす。

註七二 ヲンヌメ「經濟學批判」前掲書、第四四五頁

註七三 高橋誠一郎「經濟學前史」第四九四頁殊に第四九七頁

註七四 高橋誠一郎「經濟學前史」第一一四頁

註七五 Daire, Collection des Principaux Économistes, Tome 1. p. 50. Note.

註七六 René Gonnard, Histoire des Doctrines Économiques. Tome 1. p. 220. 以下殊に p. 231. 參照

註七七 Caspar Cloek, Casparis Cloeki Tractatus de Aerario, sive censu per honesta media absque divexatione populi licite con-
ficiendo libri duo, Nurembergue, 1651. J.-E. Horn, Op. cit. p. 107-108.

註七八 Antonio Serra, Dalle carceri di Vicaria oggià 10 di luglio 1613. Breve trattato delle cause che possono far abbondare
li regni d'oro et d'argento dove non sono miniere con applicazione al regno di Napoli, del dottor Antonio Serra, Naples,
1613. Horn, Op. cit. p. 109-111. 高橋誠一郎「前掲書」五三八頁—五四二頁

註七九 Salmasius, De usura.—De modo Usurarii.—Dissertatio de foenore Trapezitico, Leyde, 1638 a 1640, Horn, Op. cit. p.
107.

註八〇 René Gonnard, Op. cit. p. 88-90.

註八一 Observations sur l'intérêt de l'argent. Oncken, Œuvres économique et philosophique de Quesnay, 1888, p. 402. Note
sur la Maxime XIII, Oncken, Op. cit. p. 348

註八二 Hector Denis, Op. cit., p. 76.

註八三 Le Mercier, L'ordre naturel, etc., édit Depute p. 290.

註八四 Maximes de gouvernement économique, Oncken, Œuvres, p. 238-239.

註八五 Le Mercier, Op. cit. p. 292.

註八六 Ibid., p. 293.

註八七 Ibid., p. 292.

註八八 Ibid., p. 292.

註八九 Hector Denis, Op. cit. p. 77.

註九〇 Détail de la France, chap. VII, Daire, Collection, etc., p. 169.

註九一 Ibid, chap. XXI, Ibid., p. 204

註九二 Ibid, chap. II, Ibid., p. 165.

註九三 Dissertation, etc., chap. IV, Collection, etc. p. 386.

註九四 Traité des grains, Première partie, chap. IV, V et VII.

註九五 Dissertation, etc., chap. VI, Collection, etc., p. 401.

註九六 Ibid, chap. V. Ibid. p. 390.

ボアギユルベールの「富の本質論」

一二二 (一二四二)

註九七 *Traité des grains*, chap. IX, Collection, etc., p. 366.

註九八 *Notice abrégée des différents écrits modernes qui ont concouru en France à former la science de l'économie politique.*

(*Ephémérides d'histoire*, septembre, 1769.) J. Rambaud, Op. cit. p. 131.

註九九 *Hom*, Op. cit. p. 357.

註一〇〇 マルクス「經濟學批判」(前掲書、第四二頁)

—一九三二・五・二七—

附 記

記述せるが如く、經濟的自由主義の先蹤としてのボアギユルベールの業績は先づ其の著「富の本質論」に於けるマークンチリスム批判に始まる。此の意味に於て同著は經濟學說史上重要な地位を占む可きものであり、従つて筆者は本稿に於て同著の紹介に主力を注ぎ、而て此れに意外の紙数を費したために、本稿の冒頭に於てフィジョクラト學說の根幹を以て(一)重農思想(二)自然的自由思想及び(三)財産改革思想と做し、従つて當然此等の三點に於てボアギユルベールとフィジョクラトとの關係を論述すべきであるに拘らず、重農思想及び自由主義思想に於ける兩者の關係に就いては極く簡略に論述せざるを得ず、殊に財政改革思想に於ける兩者の關係に就いては殆ど言及し得なかつた。然し此の點に於ける兩者の關係も亦極めて密接なものである。即ちケネーは其の *Note sur le Maxime XXVI*, *Œuvres*, p. 357-358 に於て一國の財政的衰微を恢復するの難事たるを説き、而して益々増大する破壊的原因は、若しも人々が唯結果を抑壓する事のみ専心して根源に溯つて観ない時には、政治家も凡ゆる注意及び努力を全く無効ならしむるを述べ、當時這般の原理を證明せるものとしてボアギユルベールの「佛蘭西詳論」を引用して、同書中に表明せられたるボアギユルベールの税制改革思想を紹介し且つ口を極めて稱揚してゐるのである。財政改革思想に於てケネーがボアギユルベールに教へらるゝ所あり

しは明らかである。

尚以上の外にボアギユルベールの地代論及び連帶思想等幾多論述せらるべきものがある。それらは皆稿を更めて詳論し度い。